

弁護士として過ごした1年

会員 小佐々 奨

1 はじめに

本稿を執筆している2017年1月現在、弁護士登録をしてから既に1年が経ち、69期の弁護士も執務を開始している季節となった。私の弁護士バッジは相変わらず金色の輝きを保っており、燦し銀にはほど遠いが、それでもこの1年間、このバッジと共に様々な経験をする事ができた。そこで、このリレーエッセイを機に、弁護士1年目の日々を振り返ってみたいと思う。

2 弁護士としての日々

私の所属している事務所は、名誉毀損事件や複雑な刑事事件を取り扱うことで有名であり、実際この1年もそのような事件に多く携わった。また、その他にも、家事事件や保全事件、知財事件、労働事件など、幅広い分野の案件を取り扱っているため、多くのことを学ぶ日々であった。

その中でも、特に印象的だったのは、昨年夏頃に世間を賑わせた刑事事件である。この事件は、事務所の先輩弁護士と2人で担当させてもらったが、ほぼ毎日新幹線で接見に行き、現場に足を運ぶなど、弁護士としての迅速かつ積極的な行動の大切さを学ばせてもらった。この事件がきっかけで、私の名前もインターネットやテレビで報道され、賛否両論、様々な意見が寄せられた。その中に、高校卒業以来何年も連絡をとっていなかった友人から、「同級生が頑張っている姿が励みになった」といったものもあり、自分の仕事は色々な形で人に影響を与えているのだなと実感すると共に、恥ずかしくない仕事をしていなくてはと身の引き締まる思いがした。

3 休日の活動

この1年は弁護士業務以外にも精力的に取り組んだ。

私は中学・高校とテニスに没頭していたが、大学に進学して以降満足にできていなかった。しかし、弁護士となり、東京法曹テニスクラブと横浜法曹テニスクラブに入会させて頂いたことで、夏場はほぼ毎週末、弁護士とは思えない体力と技術を兼ね備えた諸先輩方とテニスをする事ができた。

また、東京弁護士会は、福利厚生として、会員に観劇チケット等をお得に手配する企画を実施しており、私も同企画を利用して、様々な観劇をする事ができた（こうした企画の存在を知らなかった方は、弁護士会からのメールマガジンをチェックしてみてもいいだろうか）。

結果として、こうした休日の息抜きがあったからこそ、この1年間弁護士業務も前向きに取り組む事ができたと感じている。

4 おわりに

この1年間でたくさんの魅力的で尊敬できる弁護士に出会う事ができた。老若男女、様々な方々であったが、いずれも社会の色々なことに興味を持ち、それでいて法律家としての基本的知識も疎かにせず、謙虚に学ぶ姿勢の方々ばかりであった。どの分野の仕事にもいえることだろうが、ある程度経験を積めば、要領よく、それなりの成果をあげることができるようになると思う。しかし、魅力的な弁護士であるためには、そうした要領のよさや器用さだけで仕事をこなすのではなく、社会を形成する「人」への興味を持ち、専門家としての「法的知識」を維持・取得し続けることが必要なのだと、強く感じている。

民法（債権関係）の大幅な改正間近、私も諸先輩方を見習い、社会への興味を大切にしつつ、愚直に学ぶ姿勢で、2年目以降も頑張っていきたいと思う。